

# 国、中核市、保健所…行政医とは



下関市保健部長(兼)  
下関市立下関保健所長  
石丸 文至

愛媛県松山市出身。平成23年愛媛大学医学部卒業、愛媛県立中央病院等での研修を経て、25年厚生労働省入省。途中、内閣官房への出向を経て、令和3年より下関市保健部所属。

臨床研修医卒業後、すぐ医系技官として厚生労働省入省。行政医とは、と日々問い続けながら仕事をしています。そんな「私にも言わせて!」いただける機会をいただき、ありがとうございます。

## はじめに

リード文で「行政医とは」と書きながら、かつて厚労省の採用説明会で、「わが国には30万人の医師がいますが、行政機関に従事する医師は1800人ほどです。しかも、その中でも国で勤務しているのはたった200人ちよつとです。われわれは本当にレアな人種なんです!」とうれしそうにお話しされていた先輩方を思い出しました。おそらく皆さまも、最近のご無沙汰かもしれませんが、役所の同僚と飲みに行っても、「普通の(臨床の)医師と飲みに行っても、行政の道に進んだ理由を酒のさかかにされていることと思います。

(もちろんその逆もです)。そうすると医師としての専門性を生かして仕事に付加価値を付けることが求められます。そんな時、思い出されるのが、前述の「その分野の専門家に意見を聞けばよいのではな

いか」ということです。行政の道に進むべきか悩む医師から、「行政に入るタイミングは、研修医を終えてすぐ、経験を積んでから、いつがいいですか?」と問われることが多くあります。そんな時、私はいつも「経験を積みば積むほど、より、その分野の専門家として仕事ができます。でも、自分の専門でない分野でも、その分野の専門家に意見をもらいながら仕事することもできます。だから、入ってみようかと思った時が入り時です」と答えています。

「では、早く入ると何がいいのですか?」と問われることもありま

臨床現場で感じた課題解決のために制度を変えるしかないと思った、国のための仕事に興味があった、などといったものは答えていますが、「レアだから」というのも理由の一つだったかもしれません。しかも、必須化された臨床研修後ただちに行政医になるという純潔性もその希少価値を高めたことでしょう。

## テクノクラートとして

医師から見ると、われわれは「行政医」ですが、役人から見るとわれわれは高度な専門性を持った「技術系行政職」(テクノクラート)でもあります。ところが、入省式の際、「役人は、3日で仕事を覚え、3週

政スキルを用いた対応ができるようになります」と答えています。しかし、これは、勧誘のためにいいように答えている側面もあり、裏を返すと、他のベテラン行政官に頼ることも、いろいろな行政ツールを使うことができることには、あえて触れていません。なお、以上の答えは、私自身の「専門性」という悩みの現時点での到達点でもあります。

## 行政医という多様性と アイデンティティ

「期待の若手シリーズ 私にも言わせて!」の執筆の機会をいただき、バックナンバーを拝読しました。行政医の多様な経歴、皆さまの熱いお仕事、考え方にただただうならされました。逆説的かもしれませんが、行政医の多様性は、一つのアイデンティティになり得るのかもしれない。中央省庁でも自治体でも、これほど多様な経歴を持った職種はないのではな

いかと思っています。昨年の7月、私が下関市保健部長(兼)保健所長に着任した時、ちょうどコロナ第5波の立ち上が

間たてば前任者と同じように、3か月たてば長年いる古株のように仕事をせよ」と訓示を受け、私はその「専門性」に悩むことになりました。

医系技官の役割とは、と問い掛けた多くの先輩方からは、臨床の医師と同じく論文を読んでエビデンスに基づく施策を実施しろとか、業界団体、職能団体や学会等との調整や行政との橋渡しをしるな

りの時期でした。その後、第6波、第7波と来て現在に至りますが、自宅療養、宿泊療養、施設療養等々の仕組みを立ち上げつつ、さまざまな業務を「ICT化」「外製化」「重点化」を進めながら、目まぐるしく仕組みを変えていく日々

でした。そんな時、いつも参考にしていたのは、他の自治体のホームページでした。〇〇県はこうしているのか、〇〇市はこんなこと

## わが国の行政医のこれから

ここまでの、とりとめのない話の結論は、日本の行政医の専門性は、画一的なものではなく、医師としても行政官としても、多様な経歴によってさまざまであるという

いいよね。技官だって必ずしもその分野の専門家ではないわけだから」と。

諸外国のテクノクラートの制度もさまざまです。時に、国際保健の場などでは、欧米の政府担当者は何年も同じ人で、その仕事の知見が深いのはもちろんのこと、各国の担当者は長年の関係ができており、日本の担当者はあらゆる面で太刀打ちできない、ということが問題になることもあります。われわれ「行政医」は、行政医となるまでの経歴も含めて、時には、さまざまなポストを異動しながら何を目指していくべきなのでしょう

## 行政官として

「保健所長」の場合は、制度上基本的にありませんが、国でも自治体でも、事務官が就いていたポストに行政医が就くことがあります

そういう意味で、多様性にさらに磨きをかけるため、また、多様性からさまざまなものを得るため、行政医同士で、さらに交流を盛んにしなければならぬではないか、と感じています。そのためには、相互のさまざまなコミュニケーションの促進や、場合によっては、各行政組織の垣根を越えた人事交流などを進めてもよいのではないかと

思います。幸い、行政医の採用は、相当に柔軟な職種であることも多いと思いますので、いろいろな仕組みや取り組みができるのではないのでしょうか。日本中を探しても、行政医は今のところ1800人ほどです。これは、一人一人、目に見える関係となることも物理的に可能な人数でもあります。ぜひ、さらなる交流を深めて、日本の行政医の多様な専門性を高めつつ、その集合知で、日本の公衆衛生の向上を図って